

## 研究テーマ：基礎力をつけ、表現力を高めるための工夫

所属 室戸市立羽根中学校

氏名 中屋 千和

RG JH 2

## 1 研究の背景

本校は全校生徒 49 名、3 学級の小規模校である。生徒たちは大変まじめで、部活動や学習に熱心に取り組み、学校全体も落ち着いた学校生活を送っている。英語は私を除いて全学年各 2 名の教員が配置され、計 3 名の T T で授業を行っている。

2 年生 17 名（男子 7 名、女子 10 名）は数名の男子が活発に発言し授業をリードしているが、全体的におとなしく、積極的な発言や活動は十分にできていない。1 学期末に行ったアンケート結果では「読むこと・話すこと」が苦手だという生徒が半数近くいて、受け身的に授業を受けているように感じた。このため、まず「読むこと」に焦点をしばらく授業内での音読の時間を増やしたり、リーディングテスト（学期に 2 度実施）を行うなど、生徒に音読を意識させた。前回のリーディングテストでは、ほぼ全員が 1 単元（約 6 ページ）を読むことができていて、読みをがんばれ始めたという生徒も増えてきた。しかし、まだまだ全体の場での意欲的な発表や活動が苦手であることがわかり、自信を持たせるための授業を組み立てていきたいと考えてリサーチ・クエスチョンを設定した。

## 2 リサーチ・クエスチョン

音読指導を工夫することで、生徒が自信を持って自己表現することができるようになるか

## 3 予備調査

## ① 授業観察の結果

- ・リーディングは数名の男子が自信のある声を出している。
- ・教科書の読みの練習時にはほとんどの生徒が読めているが、意欲的な発表は約 3 分の 1 の生徒しかできていない。
- ・ペアやグループでの活動は個人差はあるものの、T 2・3 の先生にも協力してもらい、全員が取り組んでいる。

## ② 英語力を示すデータ

C R T の結果から、領域別では聞く・話す力は全国レベルにあるのに対し、読む・書く力が低く、特に「適語選択、文章の内容理解、語順整序」は低得点だった。また、観点別では「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」が低く、その傾向は授業にも現れている。

## 4 仮説の設定

- ① 授業の導入を工夫すれば、英語を話す（声に出す）雰囲気が作れる。
- ② 語彙を増やすため、毎時間単語テストや単語リストを使って語彙の確認をすることで、単語の定着に役立つ。
- ③ 本文訳を先渡しして、内容を理解させてから音読することで、自信を持って取り組める。
- ④ ペアやグループを利用して、英語を使う機会を多く作ることで表現力がつく。

## 5 計画の実践

- ① あいさつ、歌に加えて 10 問の質問をそれぞれ違う相手にし、会話練習をする。
- ② ・前時に 5 問（連語・文も含む）確認し、テストをすることで生徒の負担を軽くし、レベルに関係なくどの生徒にも取り組みやすくする。
  - ・単語リストを活用し、ペアを変えながら単語チェックをする。

- ③ 日本語訳を先渡しし、リピーティングを行った後、個人・ペア練習を十分行い、全体での発表へとつなげる。
- ④ ・生徒がオリジナルで作ったコミュニケーション活動を増やす。  
・スピーキングマラソンを実施する。

## 6 実践の結果

- ① 「声を出させる」という目的で歌を選曲したり、T2・3の先生に曲についてのエピソードなどを話してもらい動機付けをしてもらうことで、生徒が声を出しやすい雰囲気作りをした。歌は好きだが、歌えるまでには時間がかかるようだ。会話練習は1年生レベルの質問がほとんどのためか楽しくできていた。また、生徒によっては自分なりにアレンジしながら活動できていた。
- ② 1学期は単語テストをパートごとに実施（前日にノートへ練習）していたが、2学期からは毎時間実施した。事前にどの単語が出るかわかることで、英語の苦手な生徒にとっても取り組みやすかったようだ。単語の復習をペアで行い、忘れていた単語や書けないものについてチェックさせることで、練習ノートを活用する生徒が増えてきた。
- ③ 本文訳が分からないと不安な生徒が多く、最初に訳を渡して時間短縮をした。その分音読に時間を使い、リピーティング、ロールプレイ、シャドーイング等を行った。全体での個人読みは半数程度ではあるが、ペアやグループ練習では随分声も大きくなり、それぞれのパートの人物になりきり感情を込めて読める生徒も出てきて、英語を声に出すことを楽しめている雰囲気も出てきた。
- ④ 班ごとに問題を作り、コミュニケーション活動を実施したが、それぞれの班が協力し、楽しみながら活動できていた。スピーキングマラソンでは英文を意欲的に暗記しようとする姿が見られ、学力差に関係なく取り組んでいた。

## 7 結果の検証

学習指導要領の外国語の目標には「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」という文言があり、「コミュニケーションとは話すこと」という感覚が生徒にはあるが、その基礎となる言葉（単語やフレーズ）を知っていなければ、会話は不可能である。また、教師の一方的な英語を受け身的に聞くのではなく、生徒に少しでも英語を使わせるために、まずは英語を声に出してみるという目的で音読の指導を行った。この結果、生徒の感想には以下のようなものがあった。

（生徒の感想より）

- ・ 教科書を読むのを前よりがんばれ始めた。
- ・ 家で何度も練習して読めるようになった。
- ・ CDと同時に読むこと（オーバーラッピング）が1学期よりついていけた。
- ・ 恥ずかしくてあまり発表をがんばれなかった。
- ・ クイズを班で考えるのが楽しかった。

## 8 成果と今後の課題

2学期がんばれたことに「読み」と答えていた生徒が17名中6名いた。また、3学期がんばろうと思うことに「発表や会話」と答えている生徒が増えていた。このことより、英語を声に出すことに抵抗がなくなり、意欲につながってきたように思う。自信を持って自己表現する段階にはまだまだ達していないが、いきなり自己表現するのは不可能なことなので、来学期は音読指導を継続して、語彙・文型等を繰り返し真似ることで基礎力の定着につなげていきたい。そして、音読できることが目標ではなく、その先にはコミュニケーションがあるという意識を持たせられるような実践をすることで、生徒が積極的に授業参加できる効果的な指導方法を研究していきたい。